

臨床現場の視点から 血液ガス 遊離ヘモグロビンを 読む



【司会】

後藤 慎一 先生 (春日井市民病院)

【講演者】

配野 治 先生 (千葉メディカルセンター)

【会場】

幕張メッセ国際会議場1階 第9会場

【日時】

6月18日(日) 11:30 ~ 12:30

臨床現場の視点から 血液ガス・遊離ヘモグロビンを読む

【司会】後藤 慎一 先生（春日井市民病院）

【講演者】配野 治 先生（千葉メディカルセンター）

日々、ICUや手術室では様々な疾患に対して治療が行われています。

臨床現場でよく遭遇する血液ガスの値から患者の呼吸状態を把握していきます。人工呼吸器装着中の患者では、血液ガスのpHとPF ratioの評価が重要となります。人工呼吸器で補助されている換気量や呼吸回数を把握した上で血液ガスの値を読むことが正しい評価に繋がるという事を臨床現場の視点からお話し頂きます。

次に臨床現場における遊離ヘモグロビン測定の意義について触れていただきます。遊離ヘモグロビンは、補助循環（いわゆるPCPS:経皮的心肺補助装置）や人工心肺装置を用いた心臓手術で注目されており、機械的補助により血球が破壊される事によって発生します。血中遊離ヘモグロビンが少量の場合には、蛋白質であるハプトグロブリンと結合し肝臓で処理されますが、大量に発生するとハプトグロブリンでは処理できなくなり尿中に排出されます。遊離ヘモグロビンの増加は術後AKI（急性腎障害）との関連が高いとの報告が多く、術後の合併症予防についての重要性が高まっています。当日は臨床現場で遭遇するケースを挙げながら血液ガスをはじめ遊離ヘモグロビン測定の意義について触れて頂きます。

【 Memo 】